

小瀬古伸幸（著）

精神疾患をもつ人を、病院でない所で 支援するときにまず読む本 “横綱級” 困難ケースにしないための技と型

生 田 真 衣

（訪問看護ステーション和来，作業療法士）



本書を通して読むと、浮かび上がってくるキーワードがありました。それは、「利用者の主体性」です。主体性とは、暮らしの中で自らの「権利」と、それに伴う「責任」の両方をもつというあり方です。

病院では病の治療が優先されるため、社会人として当然もつべき「権利」や「責任」はいったん保留にされます。しかしご退院して地域で生活するとすれば、それらは再び本人に返されなければなりません。

本書には、さまざまな“横綱級”ケースが出てきますが、地域に住む彼らに対して小瀬古氏がどのような技と型を用いて本人に「権利」や「責任」を返していく、「主体性」を獲得させていったかが、ハラハラするようなストーリー展開で解説されています。

「主体性」というテーマに触れたとき、私には思い出されたクライアントが1人いました。うつ病があり、ひきこもっていた女性です。

「同世代は仕事をしていたり、結婚して家庭をもっていたり、皆自分の生き方をしている。それなのに自分は……」と他人と比較して、彼女は焦りと葛藤を抱えていました。私が訪問している間は、「話をし、作業するのが楽しい」と言いますが、その言葉には空疎さが漂います。「好きに使えるお金もなく、友だちと呼べる人もいな

い」と嘆くこともあり、たまに「仕事をしたほうがいいんでしょうね」と話すこともありました。そこで彼女が動き出すきっかけになればと、近隣のB型事業所への見学を手配し体験に同行しましたが、「障害がある人の中で私が仕事するのは違うと思う」と言い、中断してしまいました。何回か同じようなことが繰り返され、私もついに通所を促すのをやめてしまいました。ただ、私が訪問すると、「何のために生きているのかなって」、「死ぬ方法をネットで探していました」と話すことも増え、これからどうしたらいいのかと私自身も自問する日々でした。ご家族は、仕事をするまでに至らなくてもいいから、穏やかに生活してもらいたいと話していました。

ある日、彼女が家族の知人と話す機会がありました。その人は医療者ではありませんでしたが、彼女の生い立ちや状況を丁寧に聞き、一般的な視点からのアドバイスをしてくれたといいます。

するとその日以来、彼女自身の思考が少しずつ前向きに変容し、どう生きたいのかを考えるようになっていきました。長期的な目標を自分で立て、以前は拒否していたB型事業所についても「今の自分はここから始めて体力をつけないと普通に仕事はできない」と話

し、自ら施設とやりとりをして通所を開始しました。「数年後には一般就労を目指したい」と希望をもつようになり、訪問する私に「自立して生活できるようになったら、友だちとして会いたいです」と笑顔で言ってくれるまになりました。

彼女が変容するきっかけをつくってくれたその家族の知人は、いったいどのように彼女の気持ちに寄り添い、本人がどうしたいのかをうまく導き出せたのでしょうか。それは想像するしかありませんが、私も含めた支援者が、ともすると「症状再燃や再入院を防ぐ」ことを優先し、落ち着いた生活を送ることを良しとしがちなときに、その方が「主体性」をもつことが人としてあたり前というスタンスで接したことが彼女の背中を押して、彼女は自分の人生を自分で決める権利と、それに伴う責任を理解したうえで、自己決定していったのかもしれません。

今後も私は訪問支援を続ける中で、展開に迷ったときは、きっとこの本を開くと思います。そのたびに、「主体性」が地域の基本であることを思い出し、それに向けて一緒に踏み出す勇気をもてるように思うからです。

B5判 184頁 2,000円＋税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650